

前回に引き続き「視覚支援」についてのお話です。ほんと坂井先生らしいお話ですなあ・・・
とは言うものの、サンフェイスが紹介されている雑誌「ソトコト5月号」まだ読んでくれてないみたいですね・・・
坂井先生にも視覚的に解りやすく「ソトコト5月号→買います→読みます」のカードを送ろうかな・・・(笑) 久田

第71回 『わかるように伝えていきますか』

香川大学 坂井 聡

視覚優位とは

先月のサント物語でも述べたように、自閉症スペクトラムなど発達障害のある人が視覚優位であるということはよく聞きます。しかし、どうもしっくりこないのです。ここで使われている視覚優位ということばは、一体どのような意味があるのでしょうか。また、「視覚優位だから視覚的支援が必要だ」という主張をよく聞くのですが、視覚優位と視覚的支援との関連についてはどのように考えればよいのでしょうか。

視覚優位ということばについての一つの考え方は、自閉症スペクトラムなど発達障害のある人は、診断を受けていない人に比べて視覚優位だという意味で使われる場合です。自閉症スペクトラムなど発達障害のある人たちと、診断を受けていない人たちとの視覚的な情報処理の方法がそもそも違うということを示す使い方です。この処理方法に違いがあるのかないのかということについては、これまでに心理発達検査等の結果を比較検討する研究が数多く行われています。それらの結果からは、自閉症スペクトラムなど発達障害のある人の方が、細部の些細な変化に敏感に注意が向きやすいことや、積み木模様の成績が優れているということが明らかにされています。

このような結果から自閉症スペクトラムなど発達障害のある人は、診断のない人と比べると視覚優位だというように使う場合が考えられるのです。

しかし、これらの結果だけからは、自閉症スペクトラムなど発達障害のある人は、診断のない人と比べて視覚優位だから視覚的支援をすることが有効であるとは言えないのではないかと思います。なぜならば、これら心理発達検査等の結果と、学校などの臨床場面や家庭での日常生活の場面における行動との関連については明らかになっていませんし、このような検査の結果が、具体的にどのように役に立つのかについては、明らかにされていないからです。つまり、これらの結果のみでは、自閉症スペクトラムなど発達障害のある人に、視覚的支援が有効であるということにはならないのではないかと思います。

では、もう一つの意味について考えてみましょう。それは、自閉症スペクトラムなどの発達障害のある人個人のなかで、視覚的な情報処理と聴覚的な情報処理を比較した場合、視覚的な情報処理が優位であるというものです。ウェスクラー式知能検査の結果を比較した研究では、多くの研究で、視覚的な情報処理に比べて聴覚的な情報処理が劣っているという結果が出ています。

つまり、耳で聞いて口から答えを出す項目の検査結果よりも、目から入力して手で答えを出す検査項目の結果の方がよい場合が多かったということなのです。しかし、私が病院で相談を受けているケースについて考えてみると、特に高機能自閉症等の発達障害のある人の場合では、ウェスクラー式知能検査の結果を見ても、視覚的な情報処理と聴覚的な情報処理との間に大きな差が見

られないことも多くあるのです。またその逆で、聴覚的な情報処理の方が優れているという検査結果の場合も少なからず見られるのです。もちろん、心理の専門家が検査は実施しています。このような結果から考えると、自閉症スペクトラムなど発達障害のある人が視覚優位であるとは明確に言い切ることができないのではないかと思います。

つまり、これまでの研究の結果からは、視覚的支援の必要性の根拠は導き出せないということなのです。視覚優位ということばと視覚的支援の必要性との関連については、結論が出るだけの議論が、まだ十分にはなされていないということであると思います。

では、なぜ視覚支援は有効なのか、来月考えてみたいと思います。

坂井聡先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭、香川大学教育学部障害児教育コース准教授を経て、現在は国立大学法人香川大学教育学部教授。1997年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。その軽快なしゃべり、人柄からか、大阪では絶大な人気を誇る。

(著書)

暮らしの中のコミュニケーション(やまびこ里) クラスルームコミュニケーション(こころリース出版会) 自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア(エンバウメント研究所) など